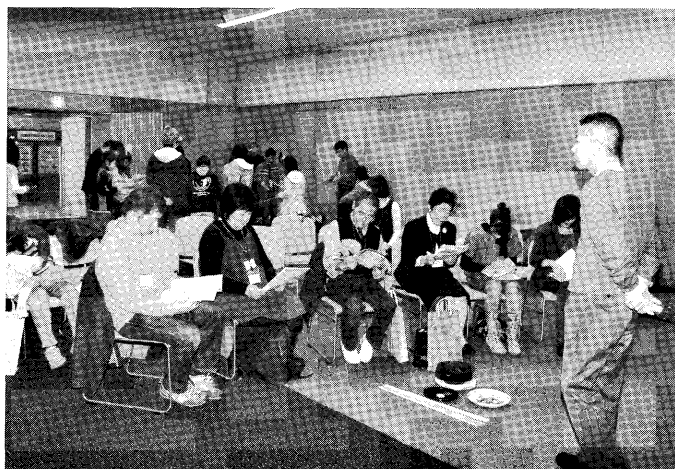


第3分科会「子どもの時にもっと遊びたかった」と後悔させない!」

主催: NPO法人富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊



◆子どもの権利条約31条で遊びの権利が明記されているように、子どもの遊び環境が保障されることは大切な子どもの権利のひとつである。それを保障するにはまず、大人が遊びの大切さをもっと理解し、自身の子ども時代を蘇らせることが必要である。この考えを「子ども力」「遊び力」と捉える。第3分科会では心身を動かして参加者自身が遊びを体験し、遊ぶことの楽しさを味わうことができるような場にしたいと思った。大人自身が遊ぶことで感じる気づきや喜びが遊び環境の保障への第一歩になると考えている。

● 分科会の様子

早川たかしによる講演と遊びのワークショップ(皿回し、さそりの標本、ハブなど)を大人の参加者に向けて行った。参加者は県内のほか高山、金沢、福井など県外の参加者も多かった。大人は10名程度の参加だったので皿回しなどの遊びをじっくり楽しむことができたのではないと思う。また、子どもの参加者は独楽、ディアボロ、皿回しで遊び、賑やかだった。

● 参加者から

◎講演を聞いて今後自分の仕事とどう結びつけていこうか考えている。皿回しを体験して衝撃を受けた。新しいカウンセリングの方法が見つかった気がする。(福井・女性カウンセラー)

◎若者の結婚コンサルタントをしているが結婚までのサポートだけでなく、その後の育児や子どもとどう遊ぶかなど子育て世代を対象にした活動も事業として考えているので良い参考になった。(富山・女性コンサルタント)
などの感想があった。

日ごろ子どもに直接かかわる方だけでなく、様々な職種の参加者がいたが、どの仕事にもつながる点があったようだ。

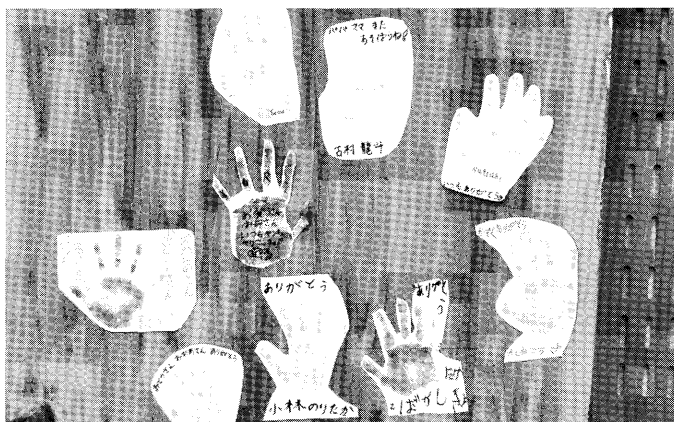
講演後も親子で皿回しをする姿があり、大人も遊びに夢中になって笑い声や歓声が聞こえた。ワークショップを通して「大人が遊ぶ」ことの大切さを実感するきっかけになったのではないと思う。

また、フォーラム後も早川たかしが、高山市で参加者と再会する機会があったり、福井県から皿の追加注文があったりとこの分科会で伝えたかった子ども力、遊び力がその後も参加者の思いに残り、広まりつつあることを感じている。

身近な大人と一緒に遊んでくれること、遊びの良き理解者であることは子どもが子どもとして生きることを保障した社会につながらと思う。今回のフォーラムを機に今後も「子ども力」「遊び力」の輪が広がっていくように活動をつなげていきたい。

第4分科会【パパ・ママあのおね 一幼稚園・保育園と子どもの表現一】

主催：富山短期大学附属みどり野幼稚園父親の会／高岡男性保育士会／育児と仕事を両立したいパパの集まり



◆大人10人、子ども4人と高岡男性保育士会から9名の参加があった。参加者対象を父親と子どもとしていたが、幼稚園・保育園では、新型インフルエンザ防止のために、子どもの人混みへの出入りを控えるよう指導していたこともあり、参加者の人数が少なかった。

男性保育士の方々には、3階ホワイエで、参加した子どもや子ども実行委員を対象に、子どもの手形の紙にメッセージや絵などを書き、それを大きな木の形のパネルに飾るという表現遊びを指導してもらった。また会場には、絵本や子育て支援関係の資料展示のブースを設置した。

この間会場では、パネルディスカッションを行った。富山短期大学付属みどり野幼稚園父親の会の坪井会長からは、会の主な活動である父親の親睦会と、子どもの遊びのための活動が紹介された。活動の結果、父親同士のつながりが深まり、父親自身が園の子ども達との遊びを楽しむようになったことが報告された。

同幼稚園青山園長からは、子どもの表現活動は出来不出来で評価しないで、表現そのものの尊重が大切であることが話された。母親はとにかく子どもの表現を善し悪しで評価したり、父親は多忙で、子どもの表現を受けとめることができなかったりする。父親にもっと子どもに関わってもらいたいとの願いで、父親の会を発足させた。活動の積み重ねの中で、子どもの表現の受けとめはもちろん、父親が子どもと共に表現を楽しむという姿が見られるようになってきた。

高岡男性保育士の会梶会長からは、男性は遊びなどの面では、女性よりも子どもに近い存在であること、男性保育者が子どもに関わることで、男の子からも女の子からも、女

性保育者が引き出すものとは別の、子どもの感性や表現を引き出すことが出来ることが話された。このような男性保育者の長所をもっと社会にアピールし、社会の理解を深めていくために、近いうちに富山県全体の男性保育者の会を発足させる予定であることが話された。

富山短期大学幼児教育学科で体育担当の橋本さんから、子どもの表現活動の意義について以下の説明がなされた。「創造力を高める、感情の表出としての身体表現の楽しさの体験、コミュニケーションの芽生えとしての他人の動作の模倣、心の解放、自己と相手を理解することにつながる同調的行動、表現する側と見る側の心の交流」。表現する力は、自他を知り、創造性や夢を育む、そして人間が平和で豊かに生きていくために大切な分野であるとの説明がなされた。

この後、参加者との意見交換が行われた。子どもの表現を育てる親のあり方が話し合われ、親自身も子どもに対して楽しかったことなどを表現する大切さが確認された。また、日本が先進国の中で最も自殺率が高く、富山県の自殺率は都道府県のワースト10に入るほど高いこと、この主要要因の一つとして、日本人や富山県民の表現力の弱さがあるのではないかと指摘もなされ、子どもにとっても大人にとっても、表現力が生きる力につながる事が確認された。

第5分科会【子どもに聴こうー不登校って何?】

主催：NPO法人子どもの権利支援センターぱれっと／富山YMCAフリースクール



◆ほっとスマイル(射水市)、富山YMCA(富山市)、ひよこの家(栃木県高根沢町)に所属する16歳から19歳の8名(男性3人、女性5人)が出演してくれました。

簡単な自己紹介の後、司会が「自分にとって不登校とは何か」と問うと、子どもたちは自分の思いを語り始めました。

不登校になった原因は「学校でのいじめや体罰」「親子関係のすれちがい」「よくわからない」などさまざまですが、追い詰められて「自分が自分でないような感覚」に至った点は共通していたように思います。そうした状況下で、拒食・過食症になったり、ひたすら眠り続けたり、リストカットしたり、母親に「大嫌いだ」と叫んだりしたそうです。当時のことを涙ながらに語る姿を見ると、「あまりにもつらくて、そうせざるをえなかったのだ」と目頭が熱くなりました。

後半は、子どもたちに、会場からの質問に答えてもらいました。不登校の子どもを抱えた参加者も多く、「親としてどう接したらいいか」という質問が多く寄せられました。子どもたちからは、「まず話を聴いてほしい」という回答が多かったです。そして、「まだ子どもだから」と否定されたり、決めつけられたり、話を聴いた後に「でも、…」と反論されたりすると、それ以上話せなくなるという意見が出されました。「いろんなことを知っ

て考えるには長い時間がかかるから、その間、暖かく見守ってほしい」「子どもは敏感だから、周りの大人は動揺せずに、どしりかまえてほしい」「学校の先生は、家庭訪問や電話は控えて、せめて手紙にしてほしい」「子どものやりたいことをどんどんやらせてほしい」などの意見もありました。最後に「今いじめられています。どうしたらいいですか」という質問には、「学校がすべてではない」「いろんな年齢の人のいる場に行けば、世界が広がり、自分の可能性に気づける」「それぞれの場にそれぞれの学びがある」といったアドバイスがありました。

どの子どもの言葉も、つらい環境のなかで考え抜いた言葉だけに、人の心を揺さぶる力を持っていたように思います。

用意した40人ほどの座席はすぐに満席になり、他の会場から椅子を借りてくるほどの大盛況でした。2時間という時間がほんとうにあっという間でした。「子どもに聴くこと」の大切さを改めて実感できる分科会になったと思います。これも出演してくれた子どもたちのおかげだと感謝しております。

第6分科会[わたしたちも日本で生きてますー外国籍／外国にルーツを持つ子どもたちー]

主催：とやま外国籍子ども支援ネットワーク／フィリピンの孤児を支える会／グループe／山のたまり場野里／富山YMCA



●ねらい

日本にいるどの子どもも幸せに暮らせるように、「多文化共生」と「外国籍の子どもたち」の現状を理解し、自分たちに何ができるかを考える機会になればと企画した。

また、当事者である子どもたち、特にアイデンティティについて悩む中高生が、自身がどんな困難に直面しているのか、なぜ困難な状況にあるのか、どうやって乗り越えればよいのか等、客観的にとらえ、日本人、そして彼らのコミュニティに向けて、自分たちの言葉で伝える第一歩の場としたかった。

●分科会のようす

初めに外国語の中に身を置く状況を疑似体験するワークショップ。言葉がわからないと、遊びはどうにかできるが、勉強は困難なことが体感できた。

その後、おとなと子ども（外国籍成人の元子どもも含む）に分かれて、話し合った。

<おとな>～外国籍と日本籍の支援者・保護者、教員～

一般論ではなく、リアルな課題が提示され、解決策に向けての話し合いもなされた。

◎外国籍保護者は、自分の経験を子育てに活かさない（教育制度・学習方法の違いなど）。

◎高校進学に際しての保証人問題（親切な日本人に頼らざる得ない現状）

◎文化、考え方の違いをどう乗り越えるか（祝祭日の学校行事など）

◎子どもたちは未来のビジョンを描けないのではないか（永住するかどうか不確定）

◎コミュニティづくりに挑戦している（当事者・学校）

<子ども>

外国籍の子どもたち・元子どもたちが、幼児期・小学時代・中学時代・高校時代・それ以降と、それぞれの体験を話し合った（差別された・勉強や人付き合いの難しさなど）。

●分科会を終えて

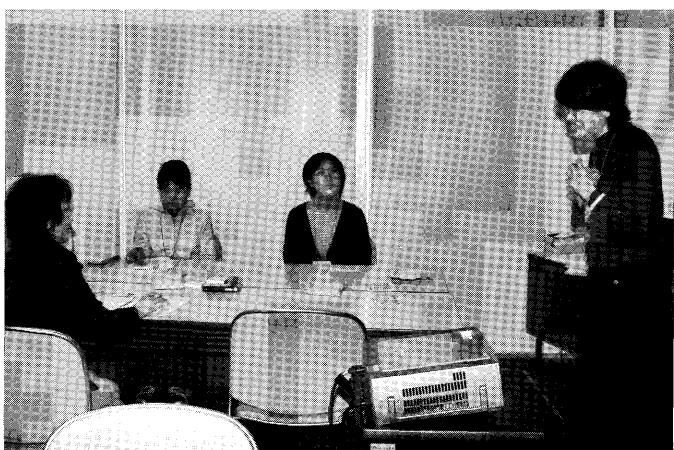
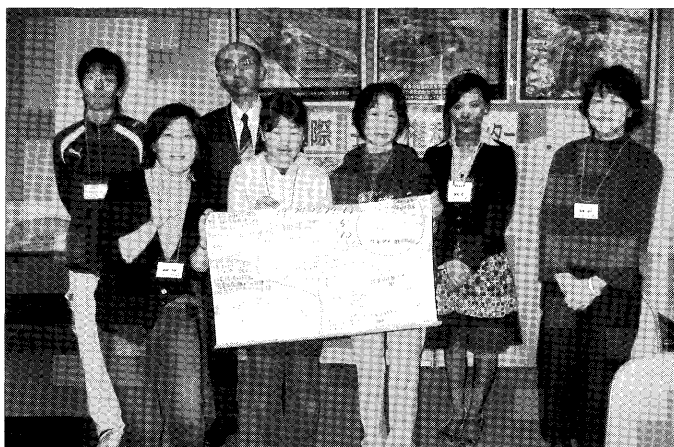
外国籍の子どもたちは、互いの話に共感・アドバイスできる喜びを感じているようだった。「話ができてよかった！こういう場にもっと参加したいから誘って！」という子どもの感想や、外国籍中学生に関わる支援者からは「分科会以降、見違えるくらいやる気に満ちている。先輩の話を聞いたのが、よかったのだらう」という声が届いた。

時間が足りなかったが、外国籍・外国にルーツを持つ子どもたちが自分たちの声を発する第一歩は踏み出せたと思う。おとなが抱える様々な困難も、日本で育った子どもたちが、自ら答えを見つけていくことに希望を繋ぐことができた。同化するための支援ではなく、共生するための支援のあり方を探っていきたい。

この分科会を機に、子どもたちの考えや思いを話し合える場を、今後もつくっていくことを予定している。（参加者：28名）

第7分科会「カンボジアの子どもと、子どもの権利条約」

主催：NPO法人国際子ども権利センター大阪事務所



◆子どもの権利条約フォーラム in とやまに参加して
(特活) 国際子ども権利センター(シーライツ) 大阪事務所
藤井浩子

今年度のCRCフォーラム会場の富山市で、去年イベントが行なわれたとき参加させていただきました。テーマは子育てだったので、幼い子どもさんを持ったお母さん方がたくさん来られていて又、子育て支援関連の市民活動団体が集まってにぎやかでした。若いお母さん方が元気でいきいきとしていて、とても活発な地域なんだと思いました。フォーラムの分科会は早くから参加団体でいっぱいになったと聞きこれはぜひ一緒に参加させていただけたらうれしいと思いました。

シーライツは、インドやカンボジアの困難な状況にある子ども(ストリートチルドレンや働く子ども、人身売買や性的な被害・搾取にあう子ども)たちの支援をするとともに日本の社会に「子どもの権利条約」を伝える活動をしています。今までたくさんのおとなに、ともに子どもの権利を保障していきましょうと伝えてきましたが、子どもを今育てているお父さんやお母さんとそして子どもたちにもっと伝えていくことが大切で有効なことだと感じました。

14日、15日と活動紹介・書籍の展示、15日の午前、分科会「カンボジアの子どもと子どもの権利条約」ワークショップ

を担当しました。参加者は4人、スタッフとで7人という小人数でしたが、カンボジアと日本の子どもたちの権利について一緒に考えることができました。地域によって子どもたちの置かれる環境は違います。日本では子どもの「権利」「基本的な人権」をとくに意識されることはありませんし、家族の関係の中に「権利」という言葉自体そぐわない感じをもたれる方が多いと思います。ですが、今までの取り組みの中で、子どもたちに「子どもの権利条約」を伝えることで子どもがエンパワーされ、子どもたちが自分で動きだすことがわかっています。途上国ではとくにそれがはっきりわかります。でもそこには子どもの権利を理解して、保障しようとするおとなが必要です。おとなと子どもがともに作る環境が必要です。富山の多くの家庭に子どもの権利が伝えられ、理解され、根付いていくことを願っています。

最後に今回スタッフとして参加したユースによるシーライツHP、大阪ブログの一部を紹介します。『私がフォーラムに参加するたびに子どもたちから感じるのは、自分の気持ちや考えを伝える事の大切さを知っている子どもは、相手の意見も大切にしているということです。一中略一このことをもっと多くの方にも感じていただく事が、日本で「子どもの権利条約」の普及を図る大きな一歩につながると感じました。』